

## 〈看護学科〉

### 基礎看護学

教授：田中 幸子 基礎看護学  
 准教授：菊池麻由美 基礎看護学  
 講師：羽入千悦子 基礎看護学  
 講師：佐竹 澄子 基礎看護学  
 講師：青木 紀子 基礎看護学

#### 教育・研究概要

基礎看護学領域では看護学生として初めて行う臨床実習である「生活過程援助実習Ⅰ」において、看護職のシャドーイングと他職種連携教育の一環として、医師、薬剤師、検査技師等の医療専門職者のシャドーイングを昨年度に引き続き行った。

フィジカルアセスメントについての教授方法の検討および看護援助、看護診断に関する研究を行った。これまでも基礎看護学領域で力を入れてきたフィジカルアセスメント教育についての研究では卒業後、フィジカルアセスメント技術がどのように活用されているのかを臨床と協力し、指導者と卒後1年目の看護師のそれぞれを対象に明らかにした。今後は、その結果を踏まえて学内での教授方法を検討する。

看護援助についての研究では、排泄および安楽、聴覚への音刺激に焦点を当てた準実験的デザインの研究を行っている。また、療養介護病棟でのフィールドワークに基づく運動機能障害患者への援助行為についての記述的研究および新たな看護診断ラベルの同定に向けた看護診断に関する研究にも続けて取り組んでいる。

排泄援助に関する看護技術の習得について、学生を対象にアンケート調査を行った。学内演習に比べて臨床実習での看護技術習得は難しく、患者の状況を踏まえて援助を考え実施できるような教授方法が必要であることが分かった。また、学内演習での技術チェックでの高評価は看護技術への自信につながっていることが分かり、技術チェックの方法や評価の方向性を考える一助となった。

#### 〔点検・評価〕

1. 他の医療専門職へのシャドーイング実習は、昨年度と同様に看護実践への学びに加え、他の医療専門職者の役割と活動を知ることで、より自らの看

護職への意識が高まるとともに、他職種連携の視点を持つことにつながっていたと考えられ、2017年度カリキュラムでは名称を「基礎看護学実習」と改め、同様の内容で継続して実施していく予定である。

2. 看護実践能力の育成に向けて精力的に教育方法の検討を行った。特に、フィジカルアセスメント教育については研究結果からも一定程度の効果が確認できている。今後、臨床実習での実践を見据え、確実な技術習得だけでなく、臨床状況に応じた技術の実践ができるようシミュレーション教育を取り入れて教授方法をさらに検討していきたい。また、日常生活の援助に関連した技術の習得にむけて、リアリティのある教授方法の工夫やe-ラーニングを用いた学習支援などを工夫していきたい。

3. 研究活動については、領域構成員がそれぞれに研究テーマをもって継続して研究を行っている。

#### 研究業績

##### I. 原著論文

- 1) 田中幸子. 占領期における労働政策と医療・看護労働運動. 神奈川法学 2016; 48(1): 173-235.
- 2) 菊池麻由美, 羽入千悦子, 佐竹澄子, 青木紀子. 初めての看護学実習における学生の臨床の見え方の変化. 日看教会誌 2016; 26(1): 1-13.
- 3) 菊池麻由美. 断続する運動機能喪失と悲しみのケアある筋ジストロフィー病棟に生じていた患者の寄り添うしくみ. グリーフケア 2017; 5: 41-57.

##### III. 学会発表

- 1) 菊池麻由美. 筋ジストロフィー患者の終の棲家である療養介護病棟の看護実践. 第36回日本看護科学学会学術集会. 東京, 11月. [日看科学会講集 2016; 36回: 489]
- 2) 菊池麻由美. 看護学実習を行う学生の臨床の見え方-4年間の変化-. 日本看護学教育学会第26回学術集会. 東京, 8月. [日看教会誌 2016; 26(学術集会講演集): 145]
- 3) 古都昌子, 鈴木佳代, 菊池麻由美, 吉田千鶴, 佐久間和幸, 荒井麻紀子, 村越 望, 田中 樹, 在間絹苗, 佐藤紀子. (交流セッション17) 看護学生とはどのような存在か-看護職生涯発達学の視座から-. 日本看護学教育学会第26回学術集会. 東京, 8月. [日看教会誌 2016; 26(学術集会講演集): 134]
- 4) 佐竹澄子, 高橋 衣, 石川純子, 遠山寛子, 嶋澤順

- 子, 久保善子, 望月留加, 梶井文子, 北 素子. 主体的学習態度を育てるコンピューター試験の在り方の評価-e-portfolioの導入との関連に焦点をあてて-. 日本看護学教育学会第26回学術集会. 東京, 8月. [日看教会誌 2016; 26(学術集会講演集): 232]
- 5) 久保善子, 嶋澤順子, 望月留加, 梶井文子, 高橋 衣, 佐竹澄子, 石川純子, 北 素子. electronic-portfolioシステム導入による学生の主体的学習能力獲得状況. 日本看護学教育学会第26回学術集会. 東京, 8月. [日看教会誌 2016; 26(学術集会講演集): 232]
- 6) 羽入千悦子, 松川香織, 菊池麻由美, 高塚綾子. 1年目看護師ができるようになったと捉えるフィジカルアセスメントの内容とできるようになる過程で役立つもの. 日本看護技術学会第15回学術集会. 高崎, 9月. [日看技会講抄 2016; 15回: 146]
- 7) 青木紀子, 菊池麻由美, 羽入千悦子, 佐竹澄子. 看護技術習得につながる看護技術教育方法の検討 排泄の援助技術に焦点をあてて. 日本看護学教育学会第26回学術集会. 東京, 8月. [日看教会誌 2016; 26(学術集会講演集): 181]
- 8) 渡邊奈穂, 小林美穂子, 谷輪加奈子. 過疎地域における若手看護職の人材確保に向けた取り組み. 第7回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会. 東京, 6月. [第7回日本プライマリ・ケア連合学会抄録集 2016; 352]
- 9) 渡邊奈穂, 岡崎研太郎, 蓮行, 渡辺賢治, 井上真智子. 「未病に取り組むまちづくり」に向けた多世代演劇ワークショップにおける参加者の体験に関する質的研究. 第7回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会. 東京, 6月. [第7回日本プライマリ・ケア連合学会抄録集 2016; 357]
- 10) 高塚綾子, 加藤章子, Diara A, 岡部紀代子, 徳永瑞子. 中央アフリカ共和国における内戦中のHIV陽性女性の母子感染の現状と母子感染への関連要因. 第31回日本国際保健医療学会. 久留米, 11月. [第31回日本国際保健医療学会抄録集 2016; 90]
- 11) 加藤章子, 高塚綾子, Diara A, 徳永瑞子. 中央アフリカ共和国における内戦時の妊産婦死亡の場所と原因. 第31回日本国際保健医療学会. 久留米, 11月. [第31回日本国際保健医療学会抄録集 2016; 102]
- 12) 岡部紀代子, 窪田和巳, 加藤章子, 高塚綾子, 永富由紀子, 徳永瑞子. 中央アフリカ共和国の高齢者および認知症の認識-首都バンギでの調査-. 第87回日本衛生学会学術総会. 宮崎, 3月. [第87回日本衛生学会学術総会講演集 2017; 254]

#### IV. 著 書

- 1) 田中幸子. 日本の医療史 各論 28. 日本における看護の歴史. 日本薬史学会編, 奥田 潤 (名城大),

西川 隆 (日本薬史学会) 編集代表. 薬学史事典. 東京: 薬事日報社, 2016. p.506-7.

- 2) 羽入千悦子. 第2章: 日常生活の援助技術 I. 環境の調整 1. ベッドメーカーキング, 2. リネン交換, IV. 清潔 2. 全身清拭, 7. 陰部洗浄, 8. 寝衣交換, 9. 整容. 藤野彰子, 長谷部佳子 (名寄市立大), 間瀬由紀 (神奈川県立保健福祉大) 編著. 看護技術ベーシックス. 第2版. 東京: サイオ出版, 2017. p.98-113, 216-23, 58-75.

#### V. その他

- 1) 菊池麻由美. 【身体知をリベラルアーツに】看護職者らしさを支える知覚 ある看護学生の「身体知」が変わるとき. 看教 2016; 57 (12): 964-9.
- 2) 菊池麻由美. 【アセスメント力と思考力を磨く! わかりやすい看護過程の教え方】看護診断を使用する臨床看護師への効果的な看護過程指導. 看護人材育成 2016; 13(2): 53-7.

## 看護管理学

教授: 永野みどり 看護管理学・ストーマケア・褥瘡ケア

### 教育・研究概要

#### I. 教育

学部の教育として, 前期の3年生の必修科目「看護マネジメント」と後期の2年生の必修科目「看護情報管理学」は, 専任教授の永野みどりが担当した。看護総合演習Ⅱは, 複数の担当教員の一人として担当した。総合実習において, 2名の4年生の「看護マネジメント」実習を担当した。4年生の必修科目「卒業研究」2名の研究指導を担当した。科目外の教育活動として, 「看護の思いを新たにす式」と「4年生の看護研究発表会」の準備・運営に担当教員の一人として携わった。

#### II. 研究

1. ストーマ保有者のストーマ外来利用状況に関する研究

- 1) ストーマ保有者の皮膚障害やストーマ装具交換の自立状況への影響要因

2008年1月から2014年7月までに直腸癌でストーマを造設しストーマ外来を利用した患者の受診状況を調査したデータを分析し, 年齢, 全身合併症, 術式, 化学療法の有無, 等による皮膚障害やストーマ装具交換の自立状況への影響について検討し, 記

述した。

2) 直腸がんでストーマ造設した患者の術後合併症

上記データを分析し、術後合併症と直腸がんでストーマ造設した患者の特徴を記述した。

2. 看護職の Healthy Work Environment  
学会発表の共同演者として協力した。

### 〔点検・評価〕

#### 1. 教育

学部教育において、前年度の経験を生かして、内容と方法改善を加えた。看護マネジメントは、臨床現場でのニーズを感じたので、医療安全の講義数を増やした。前年度から引き続き実施した自己学習とプレゼンテーションは、まじめに取り組んでいたが、それ以外の授業では、居眠りや私語などが引き続き目立った。授業参加を促すため、検討課題を提供してグループで話し合ったり、互いに評価をしたりする演習を増やす工夫をした。看護情報管理論の演習では、個人作業に加えてグループワークで質問紙調査の実施と分析・プレゼンテーションを試みた。内容を深めるための興味・動機づけが感じられるグループもあった。内容を深めるための具体的な課題を準備し、数値の算出等の実施と説明を繰り返すことが必要であると考えられた。連絡が取れた学生には個別の指導ができたが、連絡が困難な学生も存在した。授業時間内に個別の指導ができるように、講義ではなく自主的な演習時間を増やすことが課題である。

#### 2. 研究

ストーマ保有者の研究の分析を進め、学会発表はできたが、論文の掲載にまではできなかった。また、研究費の獲得にも失敗した。論文作成と学会誌への投稿、ならびに研究費の獲得が課題である。

### 研究業績

#### Ⅲ. 学会発表

- 1) 田中理子, 永野みどり, 武富貴久子. マグネット特性を反映した職場環境と看護スタッフの精神健康状態との関係. 第36回日本看護科学学会学術集会. 東京, 12月.
- 2) 永野みどり, 緒方泰子, 池田正臣, 飯田 聡, 塚田邦夫, 徳永恵子. 直腸がんによるストーマ保有者のストーマ周囲皮膚びらんの要因. 第46回日本創傷治癒学会. 東京, 12月.
- 3) 永野みどり, 緒方泰子, 池田正臣, 飯田 聡, 塚田邦夫, 徳永恵子. 直腸癌によるストーマ造設術の局所

合併症. 第34回日本ストーマ・排泄リハビリテーション学会総会. 名古屋, 2月.

- 4) Ogata Y, Katsuyama K, Tanaka S, Nagano M, Yumoto Y, Ikeda M. Characteristics of the nursing practice environment related to creating healthy work. Creating Healthy Work Environments 2017. Indianapolis, Mar.
- 5) Sato K, Ogata Y, Katsuyama K, Tanaka S, Kanda K, Nagano M, Kodama Y. The impact of workplace bullying on the health and performance of nurses in Japan. The 20th East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS). Hong Kong, Mar.

### IV. 著 書

- 1) 永野みどり. 第2章：人材の育成と活用 論点2：効率的な人材の活用 A. 人材の活用と組織デザイン. 手島 恵 (千葉大) 編, 井部俊子 (聖路加国際大), 中西睦子 (元国際医療福祉大) 監修. 看護管理学習テキスト 第4巻：看護における人的資源活用論. 第2版 (2016年度刷). 東京：日本看護協会出版会, 2016. p.75-86.

## 成人看護学

- 教授：佐藤 正美 がん看護学, 緩和ケア  
准教授：望月 留加 がん看護学, 緩和ケア, 家族看護  
講師：細川 舞 がん看護学, がん化学療法看護, 緩和ケア  
講師：室岡 陽子 周手術期看護学, リハビリテーション看護学, クリティカルケア  
講師：大坂和可子 周手術期看護学, がん看護学, 看護情報学

### 教育・研究概要

学部教育としては、概論および健康レベルに応じた4つの臨床看護学（慢性期・周手術期・がん・急性期）を学内で教授し、慢性期および周手術期看護学実習では看護実践能力をとして習得するプロセスを重視した教育を実践した。研究においては、がん看護学分野および急性・重症患者看護学分野において、各自の専門性に依拠した継続したテーマを追究した。

#### I. 教育

成人看護学においては、対象理解に基づいた問題

解決的思考を育成するために看護過程の展開を重視した教育を展開している。クリティカルシンキング能力育成を目的にして成人看護学の教員全員で担当する「成人看護実践論」は3回目の開講年度であった。今年度は教員メンバーの欠員があったため、授業スケジュールや方法を変更し、協力体制のもと充実した授業となるよう工夫した。よりリアリティのあるシチュエーションで思考できるように工夫し、ケースの情報を紙面だけではなく、独自に製作したビデオ教材を用いて情報を収集し看護計画を立案するワークを進めた。授業方法は、従来通りグループ学習を基盤としたPBLの方法をとり入れたが、個人の学修が基盤となり効果的なPBLとなるよう事前課題を課し、個人の学修評価を明確にして実施した。学修評価の視点はミーティングを重ねてループリックを作成し、それに沿って各教員が担当したグループの学生を評価した。より主体的・能動的に参加する学修をめざし、紙上事例について立案した看護計画をポスターとして大教室内に貼りだし、学生はグループごとに閲覧して意見交換をする方法を取り入れた。主体的な参加が必要不可欠な授業スタイルであることから、学生は主体的・能動的に参加していたが、学修に向かう姿勢は学生により異なっていた。学生による授業評価は概ね肯定的であったが、授業スケジュールの変更に伴い、授業の間に長く空いたことは、学修継続の視点から困難な点があった。

実習環境・体制整備においては、臨床実習指導者と振り返りをすることで連携を強化した。看護実践能力を獲得するためには、実習経験を学生自身が意味づけ、主体的に学習することが重要である。学生は、教員が臨床の場に居て適時振り返りをする、記録を基に看護過程展開に対するヒントを出す、ともに実践する、安全を確保する、などの教育的介入に対して概ね肯定的に評価をしていた。これらは継続したい点であり、今後も関係者と役割分担を調整し、適切な相互作用をしながらの実習指導が期待される。

## II. 研究

### 1. がん患者の看護に関する研究

#### 1) 直腸がん前方切除術後患者の排便障害を軽減する看護支援に関する研究

前方切除術後に特徴的な排便障害を軽減する看護方法の開発を進めている。今年度は、看護介入による効果を評価するために開発した「排便障害評価尺度 ver.2」の妥当性を併存的妥当性および識別の妥当性から検討する研究に着手した。

2) がん化学療法に伴う末梢神経障害に関する研究  
多施設との共同研究として、がん化学療法に伴う末梢神経障害の支援アプリケーションの開発を進めている。本年度は開発したアプリケーション（教育動画とサインマネジメントのための尺度を搭載）の有用性について調査し、一定の効果が得られることを明らかにした。

#### 3) 外来化学療法を初めて受けるがん患者に関する研究

臨床看護師との共同研究として、外来化学療法を受けるがん患者が初回治療前後で抱える気かきりを明らかにし、支援ニーズに関する調査を行ってきた。本年度は12名にインタビューを行った。今後もデータ収集を継続し、分析を行う予定である。

#### 4) がん看護相談外来に関する研究

臨床看護師との共同研究として、がん看護相談外来の評価と課題を検討するために過去の診療録91件より、相談内容の詳細を分析した。その結果、「命がなくなることへの苦悩」、「不安的な気持ちをセルフマネジメントできない辛さ」などが明らかとなった。今後は外来、病院、地域の中でがん患者や家族を支えるシステムを検討する。

#### 5) 地域がん診療連携拠点病院であり、エイズ診療拠点病院に勤務する看護師のHIV感染者の看護に対する不安の分析

調査の結果より、HIV陽性患者のケアを経験したことのない看護師らは、経験のある看護師よりもケアに対する不安が大きいことが明らかになった。本研究の結果を日本エイズ学会誌に公表した。

## 2. 急性・重症患者の看護に関する研究

### 1) 手術中の褥瘡発生状況と関連要因の分析

手術中の褥瘡発生状況とその関連要因を分析した結果、対象者141名中14名に発赤が認められた（発生率4.84%）。発赤の有無に影響を及ぼした項目は、診療科（整形外科）、手術時間、麻酔時間、体位（腹臥位）、体位変換、術前Hb、術後Hb、術後Albであった。さらに独立性の高い項目を検定した結果、手術時間と体位の影響が明らかとなった。

### 2) 意思決定支援ツールの質を評価する国際基準の日本語版開発

International Patient Decision Aids Standards (IPDAS) Collaborationでは、意思決定支援ツールであるディシジョンエイドの質を、開発過程および共有意思決定に基づくデザインになっているかという視点から評価する国際基準を開発している。大坂と他大学研究メンバーで、この国際基準（バージョン3）の日本語版開発をBeatonの提示した5つの

ステップを基に行い、和訳への翻訳と逆翻訳を実施した。IPDASに申請の後、インターネットで最終版を公開する予定である。

### 「点検・評価」

教育においては、問題解決能力を高める科目を昨年度の評価に基づきさらに発展させ、個人の学修目標を明確にしてルーブリックを作成し評価したことで、より効果的な内容・方法で教育を実施することができた。しかし4年生の臨地実習がない時期に授業をまとめて計画したため、学生にとっては学修しづらいスケジュールであった。授業方法についてさらに検討し修正する必要がある。今後はさらに、問題解決能力を高める批判的思考や人間関係能力を育成する授業方法を開発していく必要がある。実習教育においては、4附属病院すべてを実習フィールドとして2年目であり、実習施設との調整はスムーズに進めることができ、実習内容・方法は昨年度の評価に基づきさらに発展させることができた。継続して環境調整を行い充実した教育を継続したい。教員体制としては、成人看護学急性期領域の講師1名が新規に着任、新しいメンバーとなり成人看護学領域全体で協力して教育や組織運営を実施した。

研究においては、多くの教員が外部資金を獲得し、それぞれが積極的に取り組んでいる。今後も研究内容を教育に還元すべく、学会発表および論文発表に尽力するために、領域内で協力し合う風土を継続させて、学内・学外研究者とも協力し、時間や環境のマネジメントをしながら取り組んでいきたい。

## 研究業績

### I. 原著論文

- Osaka W, Nakayama K (St. Luke's Int Univ). Effect of a decision aid with patient narratives in reducing decisional conflict in choice for surgery among early-stage breast cancer: a three-arm randomized controlled trial. *Patient Edu Couns* 2017; 100(3): 550-62.
  - 角田明美<sup>1)</sup>, 望月留加, 神田清子<sup>1)</sup> (1 群馬大). 死を認知した再発・進行がん患者が希望を見いだすプロセス. *Kitakanto Med J* 2016; 66(3): 201-9.
  - 室岡陽子, 武田利明 (岩手県立大). 局所の阻血状態を改善する新規用具の開発とその有効性に関する実証的研究. *褥瘡会誌* 2016; 18(2): 111-7.
  - 細川 舞, 倉澤 幸 (西群馬病院), 池田久美子 (栗生楽泉園), 鎌田良子 (西埼玉病院). 地域がん診療連携拠点病院であり、エイズ診療拠点病院に勤務する看護師の HIV 感染者の看護に対する不安の分析. *日エイズ会誌* 2016; 18(3): 245-52.
- ### III. 学会発表
- Osaka W, Nakayama K (St. Luke's Int Univ). Effect of a decision aid with patient narratives for surgery choices among women with breast cancer. 14th International Conference on Communication in Healthcare (ICCH). Heidelberg, Sept. [14th International Conference on Communication in Healthcare Abstract Book 2016; 217]
  - Yonekura Y (St. Luke's Int Univ), Osaka W. Related factors of peer supporters' support skills, satisfaction and burden in Japan. 14th International Conference on Communication in Healthcare (ICCH). Heidelberg, Sept. [14th International Conference on Communication in Healthcare Abstract Book 2016; 218]
  - 大坂和可子, 竹田葉々 (浦添総合病院), 細川恵子<sup>1)</sup>, 金井久子<sup>1)</sup>, 山内英子<sup>1)</sup> (1 聖路加国際病院). 早期乳がん患者のための術式選択意思決定ガイドの役立ち度と決定満足度の関連 ランダム化比較試験. 第24回日本乳癌学会学術総会. 東京, 6月. [日乳癌会プログラム抄集 2016; 24回: 253]
  - 中山和弘<sup>1)</sup>, 大坂和可子, 戸ヶ里泰典 (放送大), 米倉佑貴<sup>1)</sup> (1 聖路加国際大), 松本真欣 (ユニバーサルビジネスソリューションズ), 関戸亜衣 (国立がんセンター). 都道府県別のヘルスリテラシーと保健医療福祉関連指標との関連. 第36回日本看護科学学会学術集会. 東京, 12月. [日看科学会講集 2016; 36回: 696]
  - 本田育美 (名古屋大), 佐々木真紀子 (秋田大), 佐藤正美, 曾田陽子 (愛知県立大), 永田 明 (長崎大), 長谷川智子 (福井大). (交流セッション1) 日本で使いやすい看護診断を発信しよう! 活動を始めてみませんか? 第22回日本看護診断学会学術大会. 福岡, 7月. [第22回日本看護診断学会学術大会プログラム・抄録集 2016; 70]
  - 藤村龍子, 菊池麻由美, 佐藤正美, 中嶋智子 (佐久大), 高島尚美 (関東学院大), 杉崎一美, 小寺直美, 吉川尚美 (四日市看護医療大), 岩本純子, 林みよ子 (天理医療大), 奥田美香 (三重県立総合医療センター), 村瀬美有紀, 竹内昌代 (鈴鹿中央総合病院), 杉浦なおみ (慶應義塾大). (交流セッション7) クリテイカル・シンキングスキルを基本にした看護診断(第4回) <看護診断: 意思決定葛藤の臨床判断プロセスと看護介入のリンケージ>. 第22回日本看護診断学会学術大会. 福岡, 7月. [第22回日本看護診断学会学術大会プログラム・抄録集 2016; 75]

- 7) Seto H, Sato M. Oral health behaviors and oral issues that occur in cancer outpatients of palliative care department. International Conference on Cancer Nursing (ICCN) 2016. Hong Kong, Sept.
- 8) Yanagihara K (Kanazawa Univ), Sato M. The state of medical care for young-elderly cancer patients in regional City A—a focus on medical facility type, commuting distance to hospitals, and communications. IPOS 2016 (18th International Psycho Oncology Society Congress). Dublin, Oct.
- 9) 佐藤正美, 務台理恵子, 小貫恵理佳 (国立がん研究センター中央病院). (交流集会 50) がん手術後に機能障害や苦痛を抱える患者への看護支援. 第36回日本看護科学学会学術集会. 東京, 12月. [日看科学会講集 2016; 36回: 448]

#### IV. 著 書

- 1) 室岡陽子. 第V章: 障害のある人の生活支援のための看護技術 ②「排泄する」機能の障害と援助技術, ⑧皮膚の機能障害と援助技術. 粟生田友子 (国立障害者リハビリテーションセンター病院), 石川ふみよ (上智大). 看護実践のための根拠がわかる成人看護技術リハビリテーション看護: 根拠がわかる看護技術シリーズ. 第2版. 東京: メヂカルフレンド社, 2016. p.122-38, 222-36.
- 2) 室岡陽子. 排泄を支援する. 金城利雄 (名桜大), 荒木暁子 (千葉県千葉リハビリテーションセンター) 編. Monthly Book Medical Rehabilitation No.201: リハビリテーション看護—看護実践のエビデンスと可能性—. 東京: 全日本病院出版会, 2016. p.33-41.

#### V. その他

- 1) 室岡陽子監修. 老年看護援助技術シリーズ7: 皮膚障害を持つ高齢者への援助技術 (DVD). 東京: 丸善出版, 2016.

## 老年看護学

教授: 梶井 文子 老年看護学  
准教授: 草地 潤子 老年看護学

### 教育・研究概要

#### I. 学部教育

老年看護学の学部教育は, 2012年度の改正カリキュラムによる実習内容の変更に伴い, 超高齢社会における地域包括ケアシステムの構築といった新しい保健・医療・福祉システムの中での高齢者への多様な看護支援の理解できることをねらいとしてきた。

特に2016年度は, 2015年度からの変更を受けて, 地域の医療機関, 高齢者施設, 自宅に在住する高齢者の多様な健康課題をもつ高齢者への看護支援ならびに地域・保健医療福祉に関わる多職種連携を学習するために必要な知識の理解につながるよう以下の各科目内容を構成した。

##### 1. 老年看護学概論

1年前期の老年看護学概論では, 加齢に伴う心身の生理的変化および社会環境の変化が高齢者の生活に与える影響, 高齢者看護における人権擁護と倫理問題, 我が国の高齢者政策の現状と課題について考え, 学生が自身の意見や考えを他者に述べるができるような教育方法を検討し, また高齢者の疑似体験や実際の大学周辺の地域に在住する高齢者との交流等の演習を通じて, 健康な高齢者の理解を深めるように教授した。

##### 2. 老年看護対象論

2年後期の老年看護対象論では, 老年期の人々に多くみられる症状 (低栄養, 摂食・嚥下機能の低下, 認知症, せん妄・うつ, 骨・関節疾患, 転倒, 失禁等) を中心とし, その看護アセスメントについて理解し, 演習を通じて高齢者の自立支援・介護予防に向けた看護実践を教授した。

##### 3. 老年看護方法論

3年前期の老年看護方法論では, 高齢者に特有の健康障害と周手術期・回復期・慢性期における治療とそれに伴う反応を理解し, 症状に適した実践方法や, 高齢者およびその家族を対象とした基本的援助方法について, リハビリテーション期にある脳梗塞の患者の看護過程を展開する演習を通じて教授した。

##### 4. 臨地実習

###### 1) 老年看護学実習 I

3年後期の老年看護学実習 I では, 脳血管疾患や運動器疾患等の障害をもつ1名の高齢患者を受け持ち, 術後の急性状況およびリハビリ期における身体・精神・社会面の特性を理解し, 退院後の自立支援に向けたリハビリテーションを生かした看護過程を実践し, 関連の多職種連携におけるチーム医療, 看護職の役割について教授した。

###### 2) 老年看護学実習 II

障害を抱えながら, 地域で生活する高齢者とその家族の特性を理解し, 地域の保健・医療・福祉サービス機関と連携しながら, 高齢者が地域で生活し続けるための継続看護を実践するための能力と態度を養うため, 4年前期に介護老人保健施設, 認知症対応共同生活介護, 地域包括支援センター, 居宅介護

支援事業所での実習を通して地域医療福祉における多職種連携と看護職の役割について教授した。

### 3) 総合実習 (継続看護コース)

4年後期の継続看護コースでは、慢性疾患等を持ちながら在宅で生活する高齢者の受診の背景(要因)や、医療機関の救急外来を含む外来受診時の、心身・社会的な状況、看護の役割や各外来の専門性のある看護実践を理解することを教授した。

## II. 研究

領域内で取り組んでいる研究活動は、以下の5つである。

### 1. 高齢者の在宅継続転倒予防プログラムと検知・支援モニタリング方法の開発と評価 (科学研究費補助金・基盤研究B・2016年度)

転倒検知アプリケーションの装備したスマートフォンを用いた介入研究の対照群の調査を行った。地域の65歳以上の高齢者を対象とした「シニアのための転倒予防講座」を隔週3回実施し、講座の初回時、初回時から3ヵ月後、6ヵ月後の心身の健康状態(BMI、筋肉量、骨密度、握力、開眼片足立ち時間、10M歩行時間、MMSE、GDS等)や保健行動(運動頻度、社会活動)に関するデータを収集した。現在分析中である。

### 2. 地域在住の認知症者と家族介護者の支援を担う潜在看護職の育成・教育プログラムの開発 (科学研究費補助金・挑戦的萌芽研究・2016年度)

潜在看護職における、地域で生活する認知症の人と家族介護者の看護支援への関心、認知症の人と家族支援に必要な学習ニーズ、ワークライフバランスを考慮した支援活動に対する希望、今後の活動の場、ならびに収入等の育成に必要な課題を明らかにするため、調査の実施が可能な協力対象者のいる対象者へ、郵送調査を、東京慈恵会医科大学ならびに慈恵の看護専門学校の卒業生6,692名を対象に実施した。1,905名から返送があり(回収率28.5%)であった。現在、分析中である。

### 3. 高齢者の座位姿勢援助におけるクッションの選択による座位姿勢、下肢浮腫、血流への影響比較研究 (看護学研究費・2016年度)

片麻痺高齢者一例における、車いすクッションの種類の相違による浮腫・血流の比較を調査し、結果を日本看護科学学会で発表した。

### 4. 摂食・嚥下障害、低栄養の問題をもつ在宅認知症高齢者に対する看護師の支援の構造化に関する研究 (看護学研究費・2016年度)

摂食・嚥下障害、低栄養の問題をもつ在宅認知症高齢者に対する訪問看護師の支援の構造化を目的としてインタビューによる質的研究を実施し、一部を看護学研究発表会で発表した。継続してデータ収集集中である。

### 5. 「検体測定室」継続利用によるHbA1cと保健行動への影響 (看護学研究費・2016年度)

「検体測定室」利用者の、半年後までの継続利用の有無、HbA1c値の推移、健康意識・行動の変化、医療機関受診・保健指導参加の有無を明らかにするため、初回利用および半年後で自記式質問紙法を実施した。回答の得られた60名を対象とし分析を行った。

## 「点検・評価」

### 1. 教育

学部教育である老年看護学の関連授業・実習においては、2015年度の評価を踏まえて、さらに授業と実習が連動できるように、学生が老年看護学で必要とする看護技術の学習を深められるように授業内容・演習内容を改善することができた。

### 2. 研究

研究活動については、領域構成員がそれぞれに研究テーマを持ち積極的に研究を遂行している。外部の競争的資金である科学研究費補助金による2研究を昨年度に継続して、外部の分担研究者と共に実施できている。また看護学研究費による3研究も継続できている。各研究の多くが現在データを分析中であるため、今後は、これらの分析結果を、学会発表ならびに論文にて公開していく必要がある。

## 研究業績

### III. 学会発表

- 1) 草地潤子, 横山悦子 (防衛医科大学校), 永野みどり. (ポスター) 車いす座位時間が長い高齢者の下肢浮腫に対するクッションの効果に関する予備的調査. 第36回日本看護科学学会学術集会. 東京, 12月. [日看科学会講集 2016; 36回: 680]
- 2) 横山悦子 (防衛医科大学校), 草地潤子, 辻 容子 (茨城キリスト教大), 佐伯由香 (愛媛大), 小長谷百絵 (上智大). (ポスター) 心拍変動解析による車椅子上の座位後傾姿勢における自律神経機能評価. 第36回日本看護科学学会学術集会. 東京, 12月. [日看科学会講集 2016; 36回: 414]
- 3) Yokoyama E (Nat'l Defense Med Coll), Tsuji Y (Ibaraki Christian Univ), Kusachi J, Saeki Y (Ehime

Univ), Konagaya M (Sophia Univ). Changes in body tangent lines that are associated with pelvic backward inclination while seated in a wheelchair: use of a seated posture measurement software. The 20th EFONS (East Asian Forum of Nursing Scholars). Hong Kong, Mar.

- 4) 千吉良綾子. (ポスター) 認知機能障害高齢者と家族が早期診察及び支援に繋がるプロセス—大都市近郊高齢者ケア外来利用者の調査から—. 第36回日本看護科学学会学術集会. 東京, 12月. [日看科学会講集 2016; 36回: 999]
- 5) 金盛琢也, 亀井智子 (聖路加国際大), 山本由子 (武蔵野大), 梶井文子, 杉本知子 (千葉県立保健医療大), 入江由香子 (高崎商科大), 新野直明 (桜美林大). (口演) 転倒予防実践講座 SAFETY on! 参加高齢者に対する啓発用教材の転倒予防効果—ランダム化比較試験—. 日本老年看護学会第21回学術集会. さいたま, 7月. [日本老年看護学会第21回学術集会抄録集 2016; 99]
- 6) 久保善子, 嶋澤順子, 望月留加, 梶井文子, 高橋 衣, 佐竹澄子, 石川純子, 北 素子. (ポスター) Electronic-portfolio システム導入による学生の主体的学修能力獲得状況. 日本看護学教育学会第26回学術集会. 東京, 8月. [日看教会誌 2016; 26(学術集会講演集); 232]
- 7) 佐竹澄子, 高橋 衣, 石川純子, 遠山寛子, 嶋澤順子, 久保善子, 望月留加, 梶井文子, 北 素子. (ポスター) 主体的学習態度を育てるコンピューター試験のあり方の評価—e-portfolioの導入との関連に焦点をあてて—. 日本看護学教育学会第26回学術集会. 東京, 8月. [日看教会誌 2016; 26(学術集会講演集); 232]

## 精神看護学

教授: 香月 毅史 精神看護学  
講師: 石川 純子 精神看護学

### 教育・研究概要

教育では、概論、対象論、方法論の流れを踏まえ、社会的視点、生物学的視点、心理学的視点からポイントを整理して理解できる講義を考案した。1年生の精神看護学概論では、近年のセルフヘルプ、ピアサポートの活動例を紹介し、メンタルヘルスが学生の身近な問題として再認識できる機会を多く設けた。講義では、基本的学習内容を網羅し、その上で学生自身が興味を抱く内容についてさらに詳しく学ぶ機会として、DVD ビジュアル教材を使用し、さらに海外の精神医療事情を紹介することで日本の精神医療を客観視する視点を育てることを目標とした。ま

た、精神保健の対象を患者に限定せず、学生自身が自分もまた対象の一人であることを意識できる講義を心がけた。2年生の精神看護対象論では、精神医学研究の医師が代表的な精神疾患の原因、症状、薬効、副作用を専門家の視点から解説した。また、リエゾン看護については、臨床で活躍する専門看護師による講義・演習を行い、医療者自身のメンタルヘルスについて考察の機会を設定した。その後、看護師の視点、当事者の視点から疾患を抱えた生活を捉え直し具体的な看護問題を考察する授業を行った。また、精神科医療の特徴的な視点を重視し、家族ケア、地域での生活援助等、他の領域との連携について考察する機会を多く設けた。また、精神看護方法論では、精神保健福祉法を基本法として行われる現在の日本の精神医療・精神看護について、対象者の行動制限のとらえ方、支援の在り方についてクリティカルな視点で考察する能力を育てることを目標とした。臨地実習では、精神科の臨床現場で、実際の患者と接することで実際の患者の思いを受け止め、共に考えることを学ぶ機会を設けた。患者—看護師関係が支援される側と支援する側の関係だけでなく、看護師が患者と共に生活し、病棟の環境を「耕す」という精神科特有のダイナミズムを学ぶことも学習目標とした。4年次の総合実習では、目的目標を再度検討し、精神科スーパー救急病棟でクリティカルパスに沿って早期治療に挑む最新医療を体験する機会と退院後の生活に向けたリハビリテーション医療を体験する機会を設定した。

研究活動は、東日本大震災後の一般市民の精神的影響について継続的に調査を行い、全国データを分析した。結果は7月に行われた第27回加齢研究会で発表した。

また、ヒューマンケアリングアプローチとディスコース分析の研究も継続的に行っている。

### 「点検・評価」

学生からのフィードバックは、授業前のミニテスト、授業後のリアクションペーパー、それに対する教員からのフィードバックを学生に返すことができるように工夫した。学外の当事者によるピアサポートグループを招いて直接語り合う機会を設定した。当事者の主体的活動の一環に触れる機会を設定することで、学生の患者・当事者に対するイメージが多様化した。座学では難しいことも、実体験で容易に獲得できる好例であった。

学外の研究費の獲得については、2016年度は科学研究費補助金申請を行っている。



## 研究業績

### Ⅲ. 学会発表

- 1) 香月毅史. 東日本大震災 18 か月後の精神的健康障害リスク 全国調査. 第 27 回加齢研究会. 東京, 7 月.
- 2) 石川純子, 佐々木愛 (吉祥寺病院), 塩月玲奈 (中山病院). 精神科救急医療における非同意入院の体験が当事者に及ぼす影響 (第 2 報) - 入院決定後の体験と思いに焦点をあてて -. 第 24 回日本精神科救急学会学術総会. 久留米, 10 月.

## 小児看護学

教授：高橋 衣 小児看護学  
講師：永吉美智枝 小児看護学

### 教育・研究概要

学部教育では、概論および方法論・演習を学内講義とし、小児病棟・小児外来・総合母子健康医療センター・NICU・GCU・障害児通所（園）支援施設での実習で小児看護実践能力を習得し教育評価を行った。特に、日常的な臨床場面での子どもの権利擁護の実践を高めるための教育方法・学生が主体的に技術演習に取り組むための教育方法を検討した。また、4年生総合実習（小児臨床看護コース）では、急性期における子どもと家族中心の24時間を通した看護を実践し、保健医療福祉チームの一員としての役割を習得した。

研究では、子どもの権利擁護に関する研究、小児がんなど慢性疾病をもつ子どもと家族に関する研究、発達障害児に関する研究、に取り組んでいる。さらに、第三病院との共同研究では、研究結果を日本小児看護学会で発表した。

### Ⅰ. 小児看護に携わる看護師の子どもの権利擁護実践に至るプロセス

本研究は、小児看護に携わる看護師の子どもの権利擁護実践に至るプロセスを明らかにすることを目的とした質的帰納的研究である。対象は、関東圏にある大学附属病院3施設の小児看護経験5年以上の看護師14名である。結果、コアカテゴリー【子ども中心に考える力】の発展プロセスとして明らかになった。発展プロセスは、〈指示のままに動き、自分で考えられない〉〈非言語化されたルールに従ってしまう〉〈子ども中心に考える力を形成し一歩踏み出す〉〈子どもの立場に立ち皆を巻き込んで実践する〉の4段階で構成されていた。さらに、【子ども中心に考えられる力】の強まりに影響をもたらす

のは、〈子どもの力の確信〉〈子どもの力を伝える工夫力〉〈子どもに引き寄せられる思い〉の3つの力であった。発展プロセスは、小児の臨床場面、看護基礎教育、現任教育、研究に適用し、看護師の子どもの権利擁護実践をより早く可能にできることが考察された。日本小児看護学会誌 2016; 25(2)に掲載された。

### Ⅱ. 小児看護に携わる看護師の子どもの権利擁護実践に至るプロセス：一歩踏み出す為の条件とプロセスを発展させる方略との関連

本研究では、看護師の思い・受け止め方に着目し、小児看護に携わる看護師の子どもの権利擁護実践に至るプロセスを明らかにし、子どもの権利擁護を実践しようと一歩踏み出す条件とプロセスを発展させる方略と〈発展プロセスに強まりをもたらす3つの力〉の関連について明らかにした。グラウンデッド・セオリー法を用いた質的帰納的研究である。条件1〔経験〕は、子どもに目を注ぎ・スタッフと協力し合い・受け持ち意識を高めつつ子どもに関わることであり、〈子どもの力の確信〉〈子どもに引き寄せられる思い〉を強めていた。条件2〔知識〕は、子どもとの関わり方・疑問を発言するための根拠となる知識であり、それらが蓄積されて条件3〔自信〕を形成していた。さらに、条件4〔発言しやすい立場・余裕感〕は、職場でのポジションの変更・強める場への参加によって形成され〈子どもの力を伝える工夫力〉を強めていた。子どもの権利擁護を実践しようと一歩踏み出す条件とプロセスを発展させる方略は、基礎教育の段階から意図的に継続的な教育の必要性が示唆された。日本小児看護学会第26回学術集会で発表した。

### Ⅲ. 小児看護に携わる看護師の子どもの権利擁護実践能力尺度の開発：信頼性・妥当性の検証

小児看護に携わる看護師の子どもの権利擁護実践能力を高めるために、小児看護に携わる看護師の子どもの権利擁護実践能力尺度の開発を行っている。本研究の方法は、二段階で構成され、第一段階は、先行研究（高橋，2016）から見出した小児看護に携わる看護師の子どもの権利擁護実践能力尺度案30項目の内容妥当性（I-CVI: content validity index at the item level）およびスケールの内容妥当性（S-CVI: content validity index at the scale level）を用いて検討する。第二段階は、第一段階で精選した小児看護に携わる看護師の子どもの権利擁護実践能力尺度項目・スケールを用いた尺度案を記載した無

記名自記式質問紙を用いてその尺度の信頼性と妥当性を検証する。現在、第一段階データ収集し分析中である。

#### IV. Parenting Stress Raising Infant Received Treatment of Retinoblastoma (RB)

本研究の目的は、RBをもつ乳幼児の母親の育児ストレスの特徴、乳幼児の疾患に関わる要因と発達的特徴の育児ストレスとの関連を明らかにすることとした。一専門治療施設において、RBの治療を受ける乳幼児の母親17名を対象とした調査を実施した。治療中と経過観察に移行した時期における縦断的および横断的分析を行った。本研究では、両眼性RBで視覚障害を併せもつ乳幼児の母親が、視覚障害のない母親よりもPSIの子どもの側面において高得点を示し、それは治療中から経過観察へ移行した時期にかけて増強する傾向がみられた。看護職は、乳幼児の発達に問題や困難を感じている母親へ、発達の専門家を紹介する必要性が示唆された。Psychoncology 2016; 25(12)に掲載された。

#### V. 現在の小児医療における患者家族滞在施設（ハウス）に対するニーズの検討

ハウスへのニーズの実態を把握し、全国各地域のハウスにおける支援のあり方と病院との連携の可能性、慢性疾病を持つ子どもと家族の自立支援活動に果たすハウスの役割を検討することを目的とした2種類の実態調査を行った。調査1のハウスの運営状況と利用実態調査では、日本の患者家族滞在施設ネットワークに登録するハウスを対象にアンケート調査を実施した。この結果、現在の小児医療の動向を反映したハウスの利用状況と家族の滞在のための従来型のニーズに加え、小児慢性疾病の在宅移行およびハイリスク新生児の増加に伴う医療的配慮が必要な患児の滞在へのニーズが増加している現状が示された。今後のハウス活動には、通院治療、医療ケアの練習、在宅移行前の子ども、終末期に家族と過ごす医療的配慮が必要な子どもや、ハイリスク妊婦、NICU入院中の面会に通うなど、産前産後の母親と家族が安心して生活できる環境づくりと、関連する多職種との連携が求められることが明らかにされた。調査2の医療的配慮が必要な患児と家族のハウスへのニーズに関する調査では、ハウスに滞在経験のある患児の親20名を対象にインタビュー調査を実施した。親自身と患児にとってより病院に近いハウスに滞在できることが安心かつ心身の負担が軽減できると考えていた。産前産後や移植後の親自身ケア、

きょうだい支援、学習支援、終末期の身体状態や医療機器を装着した患児の滞在が可能な施設内の整備、医療スタッフの配置へのニーズが示された。本研究結果は、2017年日本小児看護学会第27回学術集会での2演題の発表およびテーマセッションを予定している。本研究は2016年度日本財団助成金により実施した。

#### VI. 障がい児通所支援施設実習による看護学生の発達障がい児イメージの変容

障がい児通所支援施設実習による看護学生がもつ発達障がい児に対するイメージや関わりへの自信の変化を明らかにすることを目的に、看護学生120名を対象としたアンケート調査を行っている。本研究により発達障がい児に対するイメージや自信の変化を明らかにすることで、よりポジティブなイメージと自信を高める変化へとつなげる実習方法の検討を行っている。現在は1学年（約60名）のデータ収集が終わり、次年度もう1学年分のデータ収集を行う。

#### 「点検・評価」

教育では、新カリキュラムにおいて子どもの権利擁護・成長発達・健康増進、Family centered careの中心概念であるパートナーシップを重視した4年間の系統的な教育方法および内容を検討する。また、看護研究では、学生が研究的な思考で子どもの現状を考察する方法、技術の習得と臨床へ還元する視点をもてる教育を行う。

研究では、それぞれの教員が取り組んでいる研究において明らかになった課題を基に、継続的に追及していく。また、附属病院との共同研究を推進していく。さらに、外部研究資金の獲得および研究に取り組み、学部教育・現任教育・小児看護への還元を目指す。

#### 研究業績

##### I. 原著論文

- 1) 高橋 衣. 小児看護に携わる看護師の子どもの権利擁護実践に至るプロセス. 日小児看護会誌 2016; 25(2): 8-15.
- 2) Nagayoshi M, Hirose T, Touju K, Suzuki S, Okamitsu M, Omori T, Kawamura A, Takeo N. Parenting stress related to raising infants receiving treatment for retinoblastoma. Psychoncology 2016; 25(12): 1507-11.

### Ⅲ. 学会発表

- 1) 高橋 衣, 小児看護に携わる看護師の子どもの権利擁護実践に至るプロセス—一歩踏み出す為の条件とプロセスを發展させる方略との関連—. 日本小児看護学会第 26 回学術集会, 大分, 7 月.
- 2) 尾崎友花, 田所綱大, 渡邊 陸, 山道美咲, 葛原麻紗, 太田由美子, 君島美雪, 濱中喜代, 高橋 衣, 瀧田浩平. 気管支喘息児をもつ家族に対する効果的な環境指導の検討. 日本小児看護学会第 26 回学術集会, 大分, 7 月.
- 3) 池田若葉, 稲葉 裕, 山口 忍, 篠原厚子, 永吉美智枝, 森川 希, 山崎 亨, 田島和雄, 笹島 茂. 幼児教育学系女子学生を対象とした理想の体型像に関する食生活習慣と幼児期の母子関係との関連について. 第 27 回日本疫学会学術総会, 甲府, 1 月. [J Epidemiol 2017; 27(Suppl.1): 148]
- 4) 佐竹澄子, 高橋 衣, 石川純子, 遠山寛子, 嶋澤順子, 久保善子, 望月留加, 梶井文子, 北 素子. 主体的学習態度を育てるコンピューター試験の在り方の評価—e-portfolio の導入との関連に焦点をあてて—. 日本看護学教育学会第 26 回学術集会, 東京, 8 月.
- 5) 久保善子, 嶋澤順子, 望月留加, 梶井文子, 高橋 衣, 佐竹澄子, 石川純子, 北 素子. electronic-portfolio システム導入による学生の主体的学習能力獲得状況. 日本看護学教育学会第 26 回学術集会, 東京, 8 月.

### V. その他

- 1) 永吉美智枝. 乳幼児看護学ははじめの一步 (第 12 回) 小児がんをもつ乳幼児の精神保健と看護—母子相互作用の変化がもたらす発達への影響—. 小児看護 2016; 39(10): 1334-8.
- 2) 西 佳子, 茅島江子, 高橋 衣, 杉内 誠. 世界乳幼児精神保健学会プラハ大会と医療施設の視察と報告. 助産誌 2016; 70(12): 1032-6.

## 母性看護学

教授: 茅島 江子 女性の健康と看護ケア  
准教授: 細坂 泰子 周産期ケア, 新生児清潔ケア, 育児

### 教育・研究概要

女性のライフスタイル各時期における様々な健康問題について研究し, 母性看護における看護援助のあり方について考察した。

### I. 妊婦の生活行動・知識と医療者による保健指導状況との関連: 妊娠前半期を中心として

本研究の目的は, 妊娠前半期の妊婦の生活行動・知識と保健指導状況との関連を明らかにし, 妊娠中の保健指導のあり方について検討することである。対象は, 妊娠前半期のローリスク妊婦 415 名に, 調査票を配布した。前回までに受けた保健指導の満足度, ネガティブサポートと保健指導前後の知識, 生活行動について測定した。関連探索型量的記述的研究である。その結果, 初産, パートナーあり, 20 週未満の 273 部 (有効回答率 66%) を分析の対象とした。生活行動総得点の平均値は, 保健指導前 62.73, 保健指導後 74.21 で, 保健指導前よりも保健指導後の方が有意に高かった ( $p < 0.01$ )。保健指導満足度別では, 低群 72.72, 高群 75.62 で, 高群の方が生活行動得点は有意に高かった ( $p < 0.05$ )。これらの結果から, 妊婦の生活行動は, 保健指導後, 保健指導満足度が高いほど高まることが明らかになった。保健指導時のコミュニケーション技術を高め, 受容的な雰囲気での保健指導を行っていくことの重要性が示唆された。

### II. しつけと虐待の境界モデルの実践的活用

本研究では「学童前児童を養育する母親のしつけと虐待の境界の様相」で得られた知見が, 育児を行う母親やその周囲にとって育児不安に対する解消の契機となるか, 実践での活用性について考察することを目的とした。「学童前児童を養育する母親のしつけと虐待の境界の様相」で明らかになった 23 の概念をもとにパンフレットを作成し, 子育て当事者とその支援者にその経験と照らし合わせた自由記述を自記式質問紙で分析する。現在, データ収集中である。

### III. 学童前児童を養育する母親のしつけと虐待の境界の様相

本研究の目的は, 学童前児童を養育する母親のしつけと虐待の境界の様相を, 物語られる育児行動に着目して分析し明らかにすることである。方法: 学童前児童を養育する母親 26 名を対象にしつけと虐待の境界と思われた体験を中心に半構造化面接を行い, 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて質的に分析した。しつけと虐待の境界に関連する様相を示すカテゴリーとして「無意識下に存在する母親から子どもへのパワー」, 「子どもの属性で異なるしつけ」が抽出された。その他に「しつけに対する他者評価の優位性」, 「しつけの閾値を下げ

る母親の理想像と疲弊」, 「しつけに影響する周囲の力と母親の能否」が示された。育児を担う母親への支援として他者からの評価サポートや知識の提供, 母親に対する道具的サポートの支援の重要性が示唆された。

#### IV. 客観的指標を用いた沐浴とドライテクニクの検討

本研究の目的は, 産後1日目以降の新生児に性別と体重による層別ランダム化を用いて, 新生児の体温変化, 細菌数変化, におい指数, 体重変化の客観的指標を比較検討し, 新生児にとって最適な清潔ケアを検討することである。対象は正期産で出生し, 出生時に異常がなく, 出生体重が2,500g以上の新生児計27名とし, 産後1日目から沐浴を実施する沐浴群13名と産後1日目からドライテクニクを実施するドライテクニク群14名に分類した。評価方法は, 新生児の属性, 臍周囲の細菌数と菌種, 頭部において, 体重と体温, 黄疸値と母乳回数, 皮膚水分量とした。沐浴群とドライテクニク群では新生児の属性, 臍周囲の細菌数と菌種, 頭部において, 体重と体温, 黄疸値, 母乳回数, 皮膚水分量は有意でなかった。本研究結果では正期産で分娩時に異常のない新生児は産後1日目から沐浴を行ってもドライテクニクを行っても客観的指標に違いがあるとは言えず, どちらのケアもその優位性を結論付けることはできなかった。

#### 「点検・評価」

妊婦の生活行動をより良い方向に改善していくためには, 妊婦健診の頻度が少ない妊娠前半期から保健指導満足度を高めるような, 親身なケアをしていく必要があることが明らかになった。今後は, 各施設の個別性を把握した上で, 詳しい調査を検討していく予定である。

しつけと虐待の境界に対する実践的研究では, 研究で得られた知見の有効性を検証していく予定である。記述的研究では, 学童前児童を養育する母親のしつけと虐待の様相として, 母親が持つ子どもへの無意識のパワーと子どもの属性が明らかになった。育児を担う母親への支援として他者からの評価サポートや知識の提供, 母親に対する道具的サポートの支援の重要性が示唆された。本研究結果を論文投稿中である。

新生児清潔ケアは正期産であればどちらのケアでもバイタルサイン等の客観的指標および細菌学的評価で有意ではなかった。しかし今回のデータの対象

人数が少ないことからデータが有意でなかった可能性もある。今後はより多くの症例で分析する必要がある。

## 研究業績

### I. 原著論文

- 1) 西 佳子, 茅島江子. 妊婦の生活行動・知識と医療者による保健指導状況との関連 妊娠前半期を中心として. 母性衛生 2016; 57(2): 393-400.
- 2) 細坂泰子, 中野美穂, 茅島江子, 磯西成治. 客観的指標を用いた沐浴とドライテクニクの検討. 母性衛生 2017; 57(4): 564-72.

## 地域看護学

教授: 嶋澤 順子 地域看護学  
講師: 久保 善子 地域看護学  
講師: 清水由美子 地域看護学

### 教育・研究概要

教育に関しては2012年度入学生から保健師教育が選択制となり, 実習体系も大きく変化したため, 実習地との連携を強化して実習指導にあたっている。また, 効果的な実習につなげる準備教育として, 3年次の公衆衛生看護活動論においては近隣自治会の協力を得て, 地域のキーパーソンへのインタビューや高齢者宅への家庭訪問, 地区診断を演習に組み込んだ。

地域看護学では, 教員が各々に3つの研究テーマについて取り組んでいる。1つ目は, 独立型訪問看護ステーション看護師による在宅精神障害者地域生活支援モデル開発に関する研究である。在宅精神障害者の地域生活支援においてますます重視される訪問看護の機能を明らかにすることを目指し, 多様な地域にある独立型訪問看護ステーションでの調査を進めている。2つ目は, 産業看護職のキャリアアンカーに着目し, キャリアアンカーを明確にすることやキャリアアンカー尺度の開発を行っている。また, 産業看護職のキャリアアンカーと満足度との関連を検討した。3つ目は, 地域で生活している血液透析患者の保健・福祉に関する研究である。今年度は患者会と透析医会と協働し, 全国調査を実施した。

また, 第三病院との共同研究では, 前年度からの継続課題として結核患者の服薬および生活管理に対する入院中の指導の効果について研究を行っている。

### 〔点検・評価〕

教育に関しては、保健師教育課程の選択学生が受講する公衆衛生看護学関連の科目・実習内容の検討を進めてきたのに対し、実習指導者からも一定の評価を得ているが、今後、教育評価研究につなげていきたいと考える。

各研究については、整理した調査データを調査対象者にフィードバックし、さらに各学会でその成果を発表した。今後も、外部研究資金の活用および応募を積極的に行い、研究継続を推進する予定である。また、第三病院との共同研究については、その調査結果を学内の研究会で報告した。

## 研究業績

### I. 原著論文

- 1) 嶋澤順子. 市町村に所属する保健師による精神障害者地域生活支援の内容. 日公衛看会誌 2016; 5(3): 250-8
- 2) 牛尾裕子<sup>1)</sup>, 松下光子(岐阜県立看護大), 塩見美抄<sup>1)</sup>, 宮芝智子(神奈川県立保健福祉大), 飯野理恵(千葉大), 嶋澤順子, 小巻京子<sup>1)</sup>, 竹村和子<sup>1)</sup>(兵庫県立大). 地域診断の実習・演習における教員の評価視点 ルーブリック開発のためのパフォーマンス評価の規準となる内容の探索. 日地域看会誌 2016; 19(3): 6-14.
- 3) Kubo Y, Hatono Y (Kyushu Univ), Kubo T (Nat Inst Occupational Safety Health), Shimamoto S (Tokai Univ), Nakatani J (Univ Occupational Environmental Health), Burgel BJ (Univ California, San Francisco). Development of the career anchors scale among occupational health nurses in Japan. J Occup Health 2016; 58(6): 519-33
- 4) Kubo Y, Hatono Y (Kyushu Univ), Kubo T (Nat Inst Occupational Safety Health), Shimamoto S (Tokai Univ), Nakatani J (Univ Occupational Environmental Health), Burgel BJ (Univ California, San Francisco). Exploring career anchors among occupational health nurses in Japan: a qualitative study. Jpn J Nurs Sci 2017; 14(1): 61-75.
- 5) Kubo T<sup>1)</sup>, Takahashi M<sup>1)</sup>, Liu X<sup>1)</sup>, Ikeda H<sup>1)</sup>(<sup>1</sup>Natl Inst Occupational Safety Health), Togo F<sup>2)</sup>, Shimazu A<sup>2)</sup>(<sup>2</sup>Univ Tokyo), Tanaka K<sup>3)</sup>, Kamata N<sup>3)</sup>(<sup>3</sup>Kitasato Univ), Kubo Y, Uesugi J (RIKEN). Fatigue and sleep among employees with prospective increase in work time control: a 1-year observational study with objective assessment. J Occup Environ Med 2016; 58(11): 1066-72.
- 6) Sugisawa H (J.F. Oberlin Univ), Shimizu Y, Kumagai T (Osaka City Univ), Sugisaki H (Hachioji Azumacho Clin), Ohira S (Sapporo Kita Clin), Shinoda T (Kawakita General Hosp). Effects of socioeconomic status on physical and mental health of hemodialysis patients in Japan: differences by age, period, and cohort. Int J Nephrol Renovasc Dis 2016; 9: 171-82.

### III. 学会発表

- 1) 久保善子, 嶋澤順子, 望月留加, 梶井文子, 高橋 衣, 佐竹澄子, 石川純子, 北 素子. electronic-portfolio システム導入による学生の主体的学習能力獲得状況. 日本看護学教育学会第 26 回学術集会. 東京, 8 月. [日看教会誌 2016; 26(学術集会講演集): 232]
- 2) 佐竹澄子, 高橋 衣, 石川純子, 遠山寛子, 嶋澤順子, 久保善子, 望月留加, 梶井文子, 北 素子. 主体的学習態度を育てるコンピューター試験の在り方の評価-e-portfolio の導入との関連に焦点をあてて-. 日本看護学教育学会第 26 回学術集会. 東京, 8 月. [日看教会誌 2016; 26(学術集会講演集): 232]
- 3) 久保善子, 鳩野洋子, 久保智英, 島本さと子, 中谷淳子. 産業看護職のキャリアアンカー尺度の開発. 第 89 回日本産業衛生学会. 福島, 5 月. [産業衛誌 2016; 58(臨増): 302]
- 4) 清水由美子, 杉澤秀博(桜美林大), 熊谷たまき(大阪市立大). 在宅で生活している要介護透析患者の介護者が感じている介護上の問題や悩み 自由記載の分析から. 日本老年社会科学会第 58 回大会. 松山, 6 月. [老年社会科学 2016; 38(2): 215]

### IV. 著 書

- 1) 清水由美子. 第 1 章: 人々の基本的な生活と人間のあり方, 第 9 章: 保健活動. 清水英佑監修. みるみるナーシング: 健康支援と社会保障制度 2017. 東京: テコム, 2016. p.2-8, 13-20, 156-87.

### V. その他

- 1) 久保善子. 今月の海外文献. 産業保健と看護 2017; 9(2): 78.

## 在宅看護学

教授: 北 素子 在宅看護学  
 講師: 遠山 寛子 在宅看護学  
 講師: 杉山 友理 在宅看護学

### 教育・研究概要

在宅看護学では学部教育として、2011 年度より、在宅看護学概論から演習型授業での在宅看護援助論、

在宅看護学実習という一連の学習過程において、在宅看護の特徴を踏まえた看護過程の展開能力修得に重点をおいている。本年度も継続して、その教育評価研究を行った。また、各教員の関心テーマに沿った研究を進めた。

### I. 在宅看護学領域における反転授業評価：知識の定着を目指す

在宅看護に特徴的なアセスメントの視点を教授するために、従来講義内で実施していた疾患や症状のメカニズムについてe-ラーニングを活用して事前学習を行い、講義の中でアセスメントのポイントを重点的に教授する反転授業を導入している。これまでの経過で、反転授業の効果を検証したところ、反転授業の評価として授業目標の一つであるアセスメントポイントの理解度と事前課題である講義の動画視聴の有無による違いは見られなかったため、効果があつたかどうかを検証するにいたらなかった。そこで、知識の定着を図るために動画視聴後にそれらの知識を学生自身が整理できるようにワークシートを導入した。その結果、ワークシート作成により知識の確認がよくできたと自己評価が高い学生ほど、定期試験における該当部分の得点が高いことが判明した。今後これらを活用しながら、在宅看護援助論へとつなげてく更なる方略が必要である。

### II. 急性期病院における認知症高齢者ケースの退院支援プロセス構築の研究

近年、認知症を有する高齢者が他の疾患の治療を目的として急性期病院に入院する機会が増えているが、その退院支援は困難ケースに挙げられる。認知症特有の困難性に対応した退院支援モデルを開発するため、急性期病院の退院支援部門の看護師が関わる認知症高齢者の退院支援プロセスを明らかにすることを目的として、複数ケーススタディ法を用いた研究に取り組んでいる。

### III. 訪問看護師、家族介護者と在宅診療医が活用できる情報共有のためのアプリ開発

在宅療養の現場では、訪問時に適切なケア提供をするためには訪問看護師と在宅診療医のみならず、家族との情報共有は療養者を訪問時にアセスメントする際にきわめて重要である。そこで、3者間で共通して活用できるWEBアプリを開発中である。今後は、これらを実際に活用し、その有用性を確認していく予定である。

### IV. 複数の訪問看護事業所を利用する小児の訪問看護事業連携モデル開発

在宅で生活する医療的ケアを必要とする小児は増加しており、合わせて小児の訪問看護の需要も増えている。しかしながら小児を対象とした訪問看護を実施できる事業所と看護師は限られている現状にある。訪問看護事業所は小規模が多いことから、小規模訪問看護事業所が連携し合うことにより在宅で療養する小児やその家族に対する支援体制強化が可能となると考える。そこで、複数の訪問看護事業所を利用する小児の訪問看護事業所モデル開発を行う研究に取り組んでいる。

#### 「点検・評価」

在宅看護学では、積極的にアクティブラーニングを取り入れており、その教育評価に継続的に取り組んでおり、今回は反転授業の有効性を検討した。その検討内容を参考に、今後さらなる授業改善を行っていく必要がある。また教育評価研究を継続し、より効果的な教育の実施を目指していく。

各教員が取り組んでいる研究は、いずれも在宅看護学領域では重要なテーマであり、領域内でサポートしあい、さらに発展的に取り組んでゆきたいと考える。

## 研究業績

### I. 原著論文

- 1) Kita M, Ito K (Univ Human Arts Sci), Ryu S (Tokyo Women's Med Univ). Family life stability scale for the family caring for frail elderly persons. *Jikei Med J* 2016; 63(1): 1-13.
- 2) Toyama H, Honda A (Tokyo Med Dent Univ). Using narrative approach for anticipatory grief among family caregivers at home. *Glob Qual Nurs Res* 2016; 3: 2333393616682549.

### III. 学会発表

- 1) 遠山寛子, 杉山友理, 北 素子. 在宅看護学領域における反転授業 (Flipped Classroom) 評価-ワークシートを活用した知識の定着-. 日本教育工学会第32回全国大会. 大阪, 9月. [日本教育工学会第32回全国大会講演論文集 2016; 623-4]
- 2) Kita M, Yoshida R, Toyama H. Process from admission to discharge among elderly individuals with dementia at acute care hospitals. 19th East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS). Chiba, 2016 Feb.

- 3) 佐竹澄子, 高橋 衣, 石川純子, 遠山寛子, 嶋澤順子, 久保善子, 望月留加, 梶井文子, 北 素子. 主体的学習態度を育てるコンピューター試験の在り方の評価－e-portfolioの導入との関連に焦点をあてて－. 日本看護学教育学会第26回学術集会, 東京, 8月. [日看教会誌 2016: 26(学術集会講演集): 232]

#### V. その他

- 1) 杉山友理. 【障がいのある子どものフィジカルアセスメント～複雑で多様なヘルスケアニーズをもつ子どもと家族に対して看護師ができること～】系統的フィジカルアセスメント 一般状態のアセスメント. 小児看護 2016: 39(5): 564-9.